

新学習指導要領の実施が2022年度に迫る中、21年度は、新課程に向けた計画とその実践を通じた授業と評価の改善が求められる。新課程初年度に向け、実践事例や解説記事により現場の疑問や課題を解決し、自校の計画・実践につながる情報を提供する。

— 疑問や課題を解決！実践につながる！ —

新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

テーマ

「総合的な探究の時間」に向けた準備

セミナーレポート

ウェブセミナー 新課程1期生入学に向けた学びの設計と実践 第7回

生徒のやりたい！を引き出す探究的な学び実践の第一歩【第2弾】

新学習指導要領の移行措置を受け、多くの学校が「総合的な探究の時間」を既に実施している。現在は、2022年度入学生を迎えるにあたって、どのような探究的な学びを進めていくか、各校でその検討が山場を迎えているところだろう。そこでベネッセ教育情報センターは、探究学習を実践する上での現場の悩みについて、2人の有識者の経験を基にしたアドバイスと全国の実践事例から解決策を考えるウェブセミナーを実施した。

探究に関する困り事に 有識者がアドバイス

5月に実施した探究学習に関する第1回のセミナーでは、教師の課題を「マインドセット（探究の意義に関する理解の不足）」、「スキル（探究の指導に必要な知識、経験の不足）」、「アウトプット（探究に深まりを与え、次の活動につなげる機会の不足）」の3つに整理。マインドセットについては、教師の役割の明確化や目的・ゴールイメージの共有、スキルについては、スモールステップ化した活動内容の提示、アウトプットについては、外部の取り組みの活用な

ど、課題克服の要点を確認した。

探究学習をテーマとした2回目となる今回のセミナーは、教師の具体的な困り事の解決につながるよう、参加者への事前アンケートから見えた課題について、講師である有識者から助言をもらうとともに、全国の実践事例を紹介した。



イベントアーカイブは
こちらから
ご視聴いただけます

https://bhso.benesse.ne.jp/hs_online/shinkatei/report/210016.html

セミナー動画と事例に関する資料などをご覧ください。

[ハイスクールオンライントップページ](#)
>新課程>探究 よりチェック!

講師紹介



前田健志
まへだ・たけし
合同会社 楽しい学校コンサルタント Second 代表

数多くの学校で探究活動などをサポート。金沢大学附属高校 (WWW) カリキュラムアドバイザー、金沢大学高大接続コア・センター特任助教、福井大学教職大学院コーディネーターリサーチャー、仮想の学校「平和町高校」教諭。



横山和毅
よこやま・まひさき
認定特定非営利活動法人
カタリバ

福島県立ふたば未来学園中学校・高校にて学校支援統括コーディネーターとして活動。2011年カタリバ入職。対話型キャリア学習授業「カタリ場」の事業リーダーや東北拠点で実践型探究学習「マイプロジェクト」の伴走などに従事。

生徒に「自分事」の課題を見つけてほしいが……

教師の悩み

- 探究を自分事として捉えている生徒が少ない
- とりあえずやっていますという生徒も少なくない
- 探究テーマがなかなか決まらない。とにかく時間がかかる

興味のある事柄から問いを練り上げていく

自分事と捉えられるような探究テーマを設定するためには、好きなことを探究してよいという「心理的安全性」が必要だと、前田先生は言う。探究テーマを検討する過程で、漫画、アイドルなど、生徒の好きなものが上がった時、それを教師が否定しないことで、「自分自身を出してよい」といった安心感につながり、「自分事」の問いを生み出す基盤になるといえる。その上で、例えば、ベクトルボトルなど、身近な事象から、「何でできているのか」「どのように作るのか」「いつからあるのか」などと、問いをつくる練習を勧めた。

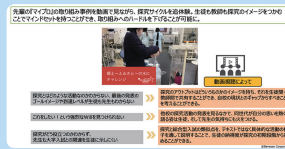
横山氏も、高校生が関心のある

事項を出発点に、「具体的には?」「起きている原因は?」「関連しそうな分野は?」などと、小さな問いを重ねていく過程で、自分らしい問いが生まれると説明した。

実践事例 1

先輩の事例動画を視聴して、探究のイメージをつかむ

東京都立葛飾野高校は、「Classi×マイプロジェクトサポート(*)」に取り組んでいる。探究テーマの検討に先立って、探究に取り組んだ複数の先輩の事例動画を視聴して、探究の流れを追体験する。さらに、自分と同じ高校生が探究テーマについての思いを熱く語る様子を見ることで、自分の興味・関心から探究テーマを設定すればよいことを、生徒は実感する。



* NPO 法人カタリバと Classi 株式会社が共同開発した実践型探究学習教材

調べ学習で終わって、探究が深まらない

教師の悩み

- スマホを使った調べ学習しかしていない
- コピーアンドペーストをしたり、信頼性の低い情報を引用したりしている
- 調べ学習からの課題発見・考察へ向けての指導が難しい

調べ学習と探究学習の違いを生徒に理解させる

探究学習の目的が明確でないと、インターネットで調べて終わる。横山氏は言う。そもそも、「調べる」とひと口に言っても、探究テーマに関する「原因」「歴史」「比較」「事例」など、実は様々な観点、問いが存在する。調べる際には、そうした観点を整理しておくことが重要だと説明した。また、横山氏は、調べ学習にとどまって思考の深まりが見えにくい生徒には、反対意見を集めさせるのがよいとアドバイスをした。例えば、地域や社会の課題を探究テーマに据えた場合、その課題を解決することで、むしろ困ってしまう人はいないかを考え

させ、その人たちに話を聞くことを提案するといった指導が考えられる。教師のそうした働きかけによって、生徒は課題を多角的に見ることができるようになり、探究が深まっていくだろう。

両講師が指摘するのは、「生徒に『探究学習は調べ学習ではない』と言い切ること」の重要性だ。調べ学習は、事実を調べて整理すれば終わりだが、探究学習は、調べたことを基に考える中で新たな問いが生まれる。そのように、調べ学習と探究学習の違いを確認させることも重要だ。前田先生は、生徒との信頼関係を前提に、「調べ学習で終わっている生徒に、『で?』と尋ねると、生徒自身が深まりのなさに気づくことがある」と、自身の指導経験を披露した。

発表など、生徒のアウトプットの場合はどのようにつくる？

教師の悩み

- 発表会がゴールで終わってしまう
- 調べただけで、メッセージ性や問題意識を見いだせることが少ない
- 発表に向けた準備が、教師の負担になっている

発表の質よりも思考の深まりを重視

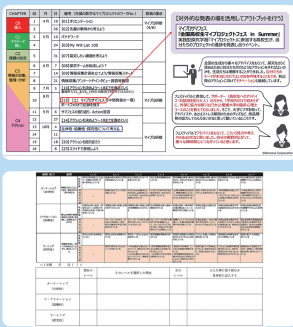
探究学習の成果を、論文やポスター発表といった形でまとめさせる学校は多い。その中で、アウトプットのよりよい形を模索している学校も少なくない。

横山氏は、「探究学習のゴールは、よい発表をすることではない。自分自身の成長・変化を自分の言

実践事例 2

中間発表の場を設け、ルーブリックで成長を実感

愛媛県・私立聖カタリナ学園高校では、8月に開催された「全国高校生マイプロジェクトフェス in Summer」を中間発表の場として活用した。参加した生徒たちは、他者からのアドバイスをすることで、自らの探究を見つめ直し、軌道修正をする。また、各学期末には、「マイプロジェクトルーブリック」を基にした振り返りと面談を実施。自分がどのような成長をしているのかを実感させ、次のアクションを考えさせる機会にしている。



葉で語れるようになることが一番大切だ」と指摘する。その上で、「よい発表」の定義は、何を目的とした探究学習なのか、発表を聞いているのは誰か（生徒、教師、大学教授、民間企業など）など、評価基準や評価者によって変わってくと語った。そのため、発表を評価する場合、生徒に対しては、「発表における基準での評価結果であって、探究学習そのものの評価

とは異なることを伝えることが重要」「評価基準を明確に示さないと、発表後、生徒にもややもやした思いが残ってしまうこともある」とアドバイスをした。

探究学習ではなぜ発表という機会を設けているのか、発表は何を目的として、誰に、何を伝えるのか、どのような発表手段が効果的だと考えられるのかを、生徒自身に整理させてから発表の準備に取り組ませることが重要だろう。そのためには、まずは教師から、発表の場を通じて何を考え、学んでほしいのかを生徒に伝えることが

課題 4

特定の教師に負担がかかる。

忙しくて対応できない

教師の悩み

- 教師間で取り組みへの温度差や指導力の差が大きい
- 研修を企画しても、多忙を口実に参加してもらえない
- 探究担当者の負担が大きく、教師全体の指導のレベルが上がらない

外部リソースを活用する仕組みづくりを

専門の教師がいない「総合的な探究の時間」では、探究学習に熱

欠かせない。横山氏は、「プレゼンテーションプロジェクトからプレゼンテーションランニングへの発想の転換が必要。先生方自身が、最終的な発表の質ではなく、その発表に至るまでの思考の深まりや、準備を通じた成長に価値を置いてほしい」と訴えた。

なお、発表を生徒にとってよりよい経験とするためには、外部のコンテンツなども有効に活用するとよいと、横山氏は指摘した。外部コンテンツの活用は、教師にとっては発表の場づくりにかかる負担の軽減にもつながる。

心な教師に負担が集中してしまうこともある。そうした状況を改善するために、前田先生は、「教師間の人間関係の構築」を強調する。探究学習に限らず、日々の教育活

動の気づきについて、気軽に対話できる雰囲気をつくるのが求められる。また、探究学習を推進するリーダー的存在の教師については、「自分がしっかりしなくてはと、完璧な形を目指してしまいがちだが、実は多少の『隙』が、人を巻き込む上ではポイントとなる。周囲は、ちょっと心配だから助けてあげよう、一緒にやってあげようと思うものだ」と、リーダーとしての「助けてもらう力」の重要性を語った。

横山氏は、「すべてを学校で完

課題 5

カリキュラムはどう組めばよい？

教師の悩み

- どのようなカリキュラムを組めばよいか知りたい
- 生徒たちの探究が深まるカリキュラムはどのようなものか
- 3年間のカリキュラムをどのように組めばよいか

生徒の立場に立った無理のないカリキュラムを

前田先生は、カリキュラム作成で意識したいポイントとして、「自

結しようと思わず、外部リソースを活用することが教師の負担軽減につながる」と説明。「そのためには、メディアを利用したい。プレスリリースを積極的に出すことで、地元メディアに取り上げられ、それを見た外部の人たちから問い合わせが入り、サポートにつながるケースも少なくない」とアドバイスをした。横山氏によると、地域サポーター制度という登録制度をつくり、同制度に登録している大人に、生徒が直接連絡を取れる仕組みを持つ学校もあるという。

分が生徒だったら、このカリキュラムで学びたいかを常に自分自身に問い、自分がしたくないことを無理に入れ込まない」ことを挙げた。その上で、「探究学習にも停

滞期、つまりきがあることを想定し、その時期に生徒の意欲を高める起爆剤となる活動を用意しておきたい」と語った。

探究学習は、フィールドワークや生徒同士の対話が重要な活動となるためにコロナ禍で大きな影響を受けた教育活動だ。そうした予測困難な事態の発生も念頭に、カリキュラムに余白をつくっておくことの大切さも前田先生は指摘した。同時に、「総合的な探究の時間」だけでカリキュラムを考えるのではなく、すべての教育活動を俯瞰し、生徒が無理なく、バランスよく学んでいるか、学校としての1年間のリズムに合った形になっているかを確認しながらカリキュラムを組むことの重要性などを訴えた。

カリキュラムの立案では、学校として育成を目指す資質・能力、スキル・ポリシーを踏まえることも求められる。そうした観点については、後日開催した「探究カリキュラム制作勉強会」にて紹介されているので、アーカイブをご覧ください。

「探究カリキュラム制作勉強会」アーカイブ

https://bhsso.benesse.ne.jp/hs_online/shinkatei/report/210017.html

カリキュラム制作を効率的に進めるポイントを6ステップで解説するセミナーを開催しました。

[ハイスクールオンライントップページ](#)>新課程>探究 よりチェック！

新課程に関する情報は、『ハイスクールオンライン』でお届けします！

- 新教育課程の参考になる特設コーナーを設置
- 過去のオンラインセミナーのアーカイブ動画・資料などを掲載

新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

『ハイスクールオンライン』[トップページ](#)>新課程からアクセス

https://bhsso.benesse.ne.jp/hs_online/shinkatei/index.shtml